OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	安政以後の大阪學校
Author(s)	中井, 終子
Citation	懐徳. 1931, 9, p. 56-101
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88837
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

を、かゞまりたる方を、一口令レ食給たりけり。（巻一）

慶長以降幕府の饗禮には、專ら園部流を用ゐた。大體は四條流を相傳したものである。其の後生間流が生れて、延享の京羽二重にも園部流と生間流とが並び見えてゐる。併し後には唯生間流が見ゆるのみで、現に京都には、この流を酌める庖丁人がある。（昭和六、八、一四）

安政以後の大阪學校

中井終子

今より廿年前、即ち昔の懷德堂が廢校になつてから四十三年目に、現代の懷德堂が再建せられようとする旺盛な氣運に向つた時、其第一着として懷德堂記念祭が大阪中の島公會堂で擧行せられ、記念展覽會の開催も行はれて、古來關西での唯一學府であつた懷德堂追憶の爲に人心の灼熱した頃、私共兄妹も東京から西下して此の盛事に列席しましたが、其の時或必要に因つて家兄の記憶に殘る懷德堂の實際を、創立當時より私が抄錄したものがありましたが、其後古い時代の事蹟や大綱に屬する事は屢々大阪の學者諸賢の傳播に依つて周知の事柄となり、其上現代の懷德堂は新しい校舍を再建せら

舊懷德堂已有園圖竝讃

れてから已に十五星霜を閲した今日、其表面からの歴史を今更縷述の必要を認めません故、今般堂友會諸氏の委囑の爲に、安政以後の懐徳堂を舊錄から引離して、兄の代りに抄錄する事に致しました。殊更安政以後を選びましたのは家兄が童年の追憶に基づく爲で、印象が最も確實だからでございます。順序として暫く往事を回顧いたしますと、

●懐徳堂創立　享保九年五月。創立者中井甃庵　場所　尼崎町二丁目（現今の今橋二丁目）

●増　築　享保十一年、中井甃庵時代

將軍吉宗公より敷地を賜はり始めて大阪學問所と呼ぶ。

●改　築　寶暦元年（増築より廿六年）中井甃庵時代、寛政四年の大火に烏有に歸す（増築より四十二年）

●再　建　寛政八年七月、中井竹山時代。

將軍綱吉公より御手當金を賜はる。其の頃より通俗には專ら大阪學校又單に學校と呼んでゐた。此建築は明治二年廢校の時まで存す。年數七十四年。

家兄の印象が最も深いのは此の最後の校舍であります。何人も幼時の追憶はご純眞にして熱烈なものはありませんが、わけても念祖の情の一際（きは）濃やかである家兄が十五才迄朝夕眺め明した懐徳堂の講堂や、遺書遺物に對する深い執着は、其頃から六十餘年を經過した今日でも、猶目前に見る様たといつ

て居ります。

寛政再建までの懐徳堂の繪圖は皆殘つて居りますが、漸次模様替になつたと見え、兄の幼少の頃は餘程寛政の繪圖とは違つて居たといふ事です。今其の記憶から案出した一圖を附載して置きましたから興味を以て讀まうと望まれる方は此の圖と引合せて以下の説明を讀んで頂きたいと思ひます。編首に掲げたものは其の外景であります。

一、近代懐徳堂の構造（上）

南の正門の前は今の今橋通り、此の門が薄赤くなつてをる處を見ると元は朱塗であつたらしいのですが、多年風雨に曝されて色も變り虫蝕になつて居たとの事、門に入る迄の石橋様の廣い漆喰の通路の兩側には、細長い用水池が有つて、外部は黒い駒寄で危くない様に圍んでありましたが、併しいつも浮草が茂つて蛙の棲家となつて居た有名無實の用水池であつた様です。

門を這入るとすぐ度膽を抜かれる事は、一間餘もある火災用の大團扇が門の西側の裏壁に掛つて居る事です。而も黒地に白く篆書で、學の字が一ぱいに書かれた者だといひますから、泰平の御代の火事場の光景がむしろ滑稽に思はれます。

門から玄關まで直線に五六間の間は、中は漆喰で、左右に立山石を置いた路を通じて、左手には「入德之門」といふ組格子の風雅な中門がある。是は庭へ出入する小門で、上に竹山の書で入德之門と刻

した額が掛けられ、左右には同じく竹山の「力學以修己」「立言以治人」といふ竹聯が左右に掛けてあつた。明治元年山階宮晃親王殿下御成の時は此中門を開けさせてお這入になり、庭傳ひに講堂にお上りになつた相です。

玄關の敷臺は四疊ほどで、懷德堂と書いた刻額が鴨居の上に掲げてありました。古い時代には石庵先生が書かれたのを額にして講堂に掛けてあつたのを、寛政再建の砌、竹山が之を欅板に鐫つて其方を玄關にかけ、直筆の方は掛軸にして保存せられたのであります。額の下の左右の柱には、「固有之善存而弗諼」、「當然之則循而無違」、の階聯が懸つて居ました。右は懷德の說明で、前の句は懷の字の解、後の句は德を意味した詞と諾かれます。

玄關は六疊敷で、正面に一間半の押入(向つて右方)と半間の板敷(左方)とがあり、そこに書臺と稱へた小机が二十餘も重ねてあります。是は學生が書物を學ぶ時に代る〳〵持ち出して敎師の前に携へたものです。其上に講釋日、輪講日、詩文會の定日を示した額が懸つて居て、若し臨時の休暇や祭禮などで休む場合には押入の上に掲示が出るのです。押入の襖の畫は金花鳥の墨本を張つたもの、右手の壁には朱文公の仰以觀於天文俯以察於地理云云」の拓本六枚折の屏風が立て廻してあつたのが、玄關を這入るとすぐ目に着いた相です。

玄關の西(左手)は『東房』といつて七疊半、此の南寄には大衝立が置かれて、玄關に西した裏側は虎の

墨書、其前に刀掛が置かれ、講堂に面した表側には、

讀聖賢書。立修齊志。存忠孝心。行仁義事。

といふ朱文公大書の拓本が張られて、懷德堂の象徴となつて居りました。此の四枚は、もと德川將軍家所藏の眞筆を拜借して、其頃有名な篆刻師の前川盧舟に刻らせたもので、得難い逸品とて常に諸方より所望せられましたので、特別に家人が摺つて、四枚一分で分讓して居ました。家兄などもよく其手傳をさせられた相ですが、其の刻板は今も家に藏して、日夜其神韻に親しむ事が出來ます。

二、近代懷德堂の構造（中）

懷德堂の講堂は總て中で竹山が最も最も意匠を凝して裝飾を施したものです。疊敷は十五疊で、先づ東房から這入つて來る取あひに四枚の大襖があつて、そこには易の鴻漸の圖が一ぱいに描いてある鴻漸といふのは、鴻の鳥が低い所から漸々高い所に進むといふ事にて學德向上の意を顯した者です。引手にも之と揃つた艮下巽上の漸の卦が彫刻して有ました。

此の襖の上の欄間は、網形の透し彫の中に宋六君子の圖をはめこんだ者で、周茂叔と二程子のは蔀觀月の筆、張橫渠、司馬溫公、邵康節は中井藍江の筆で、前三枚は講堂の方に向ひ、他の三枚は東房の方へ向けて、表裏兩面にして三列になつてをります。六枚共筆力最も雄健で、一瞥を加へた丈でも忘れられない程の印象を與へられますから、子供の時でも感銘深く邵子の網代車の轅などを眺め入つた

ものだと兄が語りました。畫賛は朱文公の六君子の賛辭を賴春水が竹山の委囑に依つて細書したもので、錦上錦を添ふる出來榮です。

講堂の天井は孟子の「井田」を顯して井の字形に張つた者、向つて正面(北)は一間半の廣い床の間で右手の床脇が一間、袋棚と違棚です。床の間には平常文天祥の黑本忠孝の大幅を掛け、其左の隅に螺鈿の重硯箱と大小二つの見臺がありました。大の方は講釋の時に敎授の用ゐる者、小の方は生徒が輪講の時に使つた者だ相です。

講堂の北から『西夾』といふ室に出る所に二枚の襖があつて、元は文晁の歸馬放牛の圖が勢たくましく描かれてあつた相ですが、家兄の頃には普通のしけ絹に張りかへられてしまつたとか。文晁は寬政の學校再建頃は丁度懷德堂に寄寓して居たので、竹山の需に應じて此の圖を作つたものですが、所謂寬政文晁で、中々の逸品と思はれます。

西夾の東隣に『中霤』といふ室があります。講堂と其取あひに腰高黑枠の障子があつて、其腰も文晁の鵲巢の圖で、他人の子を親に代つて敎養する意を寓した者であります。

其並に細格子の障子があり、其上に木瓜形の小窓があつて、左右の楹に「戰々兢々如臨深淵如履薄氷」「謝朝華於已披啓夕秀於未振」といふ竹山の聯が掛けてありました。

此の楣上には履軒の白鹿洞揭示の拓本の額、それと相對した講堂の南方の鴨居には、竹山の懷德堂記

の大額がかゝげられ、其下から南の『鞘の間』に出る様になつて居ました。

鞘の間は名の示す通り東西に細長い室で、そこから南の廣縁に出る所に六枚の大障子があり、其兩方の柱には、竹山の刻聯、「經術心之準繩」「文章道之羽翼」といふのを掛け、廣縁の東の隅には、朽木に面白く刻した石庵の「已有」といふ額が掲げてありましたから、其前の廣庭を『已有園』と呼びました。

講堂の北の『中霤』といふ室は、元は池で緋鯉や金魚などを放して、丁度支那の屋漏に愧ぢずといふ詞のやうに大きい天窓附の屋根のある明るい所で、四方から雨滴が此池に落ち込む様にしてあつたのを、室に接近して居て危い爲に、竹山の頃から池水を干して其上に疊を敷き、舊名を存して中霤と稱へたのであります。此と西夾との取あひに、東坡の集字を刻した不愧といふ扁額がかけてあつた相です。

中霤の北は『文質』といふ書齋で、石庵の文質と書いた幅があつたのでさう稱へたものと思はれます。北には竹山の毋不敬の額、南の楣上には蕉園の稽古といふ額があつたといふ事。此の室は前から學校預り人の書齋にきまつて居たので、安政以後は先考桐園の居間でありました。床の間には古風な日本流の時計が二つ掛つて居て、いつもヂリ〳〵と校内に時を報じて居つたと聞けば、今も猶其ヂリ〳〵が聞ゑて來る様です。

此の書齋から廊下を隔てゝ東方に學寮が二間あります。此には寄宿生が居つて終日咿唔の聲を絶たなかつたといはれて居ります。

文質と學寮との間に、二階へ登る表梯子が掛つて居りました。二階は六疊二間と二疊一間、それに物置が一間で、竹山の時から此は全部教授の室と定まつて居りましたから、安政以後は教授並河氏の一族が接まれて、その隣室の六疊には、中井家の祀壇を設け、鯊庵以下歴代の神主を祭つてあつたといふ事です。

三、近代懐徳堂の構造（下）

文質より北は皆家族の居間に當てゝありましたから只概略を記します。先づ文質の北隣、此は『奥』と稱へて八疊、左の廻り縁を隔てた一室は『祠堂』と稱へて、元は歴代の神主を祀つてありましたが、何時頃よりか神主は二階に移されて、此は隠居所になつて居ました。

奥の東隣が茶の間で、家族の食堂でした。平生人の居ない事がよくありましたが、或時室の中が燻ぶつて烟が出て來るので、驚いてあけて見ると隣家の猿公二匹爐の傍に對坐して、障子紙を破つては火中に投じ、烟たいので目をこすり〳〵泣いて居たといふ話があります。

茶の間の北の小さい二疊の一室があります。此は納戸にも產室にも充てられ、竹山の子供等から私の兄姉までは皆この室で呱々の聲をあげたのです。

臺所は頗る廣く、天井も見上げる程高かつた相です。

奥の庭を隔てゝ向ふに土藏が見えます。二階には幾棹かの簞笥長持、何十人前かの膳椀が幾組も貯へられ、下には十五六の大下櫃に米穀が充たして、饑饉の用意が周到に備はり、一々備籾糧といふ書附が張つてありました。是等は皆竹山の後繼者碩果の時代に成された事で、碩果夫妻は頗る經濟の才能に富んで居ましたから、父竹山の頃は其名の隆々たりしに似ず學校は窮乏して、書藉諸道具に至る迄甚だ貧弱でしたが、碩果一代で、學校の資産は可成膨脹しましたから、父桐園の時代には、土藏の東側に又文庫一棟が新築せられる殷盛振を示しました。

文庫の東に納屋一棟、此は學校創立前には五同志の一人道明寺屋の醬油藏のあつた場所です。奥の方はこれ丈。

序にもう一つ。それは表門を這入ると斜に右の方に敷石があり、そこの中門を入れば內玄關に達します。此は塾生の昇降口です。

內玄關の向ふ、右手に續く長屋の奥が下男部屋、其南が版揚部屋で、逸史や通語の板木が置かれ、いつも職人が出入して仕事をして居た相です。

此の一棟の長舍のある處は、寛政再建の折には竹山が寄宿生の爲に建築した五室の寮舍が並んでゐた處で、梅舍、桃舍、槐舍、桂舍、楓舍と優美な名を附け、其楣上には一々手書の扁額を掛け、方形の廣

い牖の壁は夫々名にふさはしい色彩を施し、前庭にも舍の名に應じて、其樹を植ゑさせるといふ意匠は、宮庭の五舍に彷彿たらしめる趣がありましたが、いつ頃よりの塾生は講堂に近い學寮に移され、安政以後は、其跡の長舍に名醫右林見宣の子孫で中井家の親戚に當る古林見齋、同正倫などといふ人が今でいへば學校醫の格で住んで居ました。茶の間で紙をくすべた猿公は此の人々が子供の様に愛育してゐたもので、客來の折には、よく茶菓を運ばせると、一つ二つは必ず途中で失敬する相です。併し猿公の面白い處作はよく人を笑はせました。

四、懷德堂の園庭

大阪が實業地で、雜沓地で、沒風流の地であるにも係はらず、懷德堂の一廓は自ら其の俗習に染まず、室内の裝飾から庭の草木の配置に至るまで、中々意を用ゐられた跡が見ゑて、高尚な德風を自ら示すに足るものが有つた事を思はせます。

まづ表門を這入つて、左手の小門に掛けてある「入德之門」といふ額を見ると、モー不謹愼な心では這入れない氣が致します。此の門の扉は棧の細かい板張の格子戸で兩方へ開く様になつて居ました。そこから敷石傳ひに這入ると、右手にすぐ李の樹が物言ひたげに近づきます。二間ほど敷瓦に添うて、右に折れると、飛石が講堂の廣椽まで心地よく配列されてあります。講堂から見ると、右手の中程には梨の大木が注意を牽きます。其樹の花盛りに幾度か出あうた家兄は、梨花の面影に懷德堂を忍ぶ情熱

が最も深く、今でも梨をさへ見れば、昔庠園梨花を題にて、其花盛りに毎年講堂で詩會を催され、子供ながらに列席して拙い文句を並べた事など、悲しい追憶の涙をそゝらずには居られないといつて居ります。

梨の大木から又數間離れて宝を蔽ふ程の櫻の大木があります。幹の周圍ば一抱もあり、名は揚貴妃櫻と呼びましたが、陽春三月に八重の薄紅い花を着けますと、モー學寮の人などは半分うき立つてしまひます。獨り學寮の人のみならず、父や兄の外祖までも相應に陽氣立つて、講堂と鞘の間の障子を開放し、社友や學生を集めて、梨の盛の時の様に庠園海棠といふ題の下に詩會を催し、向ふ側の町家では店頭に毛氈を敷き、客を招いて、此の花の榮華を分配せられた様に、南枝が程長く大道に突出てをるのを御招伴に賞玩して、花見の宴を開くのが例であつたといひます。

たゞひ時有つて散り、其盛は亦時の間であつても、かくばかり校舎を賑はし、人氣を引たたせて、多年此の界隈の呼び物となり、來るべき春を樂しませたのは、只此の一本の揚貴妃の花顔あざやかなりし爲でありましたが、彼は一夜の嵐に馬嵬の露と消ね、此は校舎の末路を見送つた後其榮華を冷たい土に委ねて、昔を語る人もない世に、獨り父のみが其幹を二尺程づゝに切つて久しく庭の隅に置かれたのは、流石に之を育てた人の眞心であります。梨の樹と櫻の木の間に風雅な井戸があつて、さゝやかな金釣瓶の鎖をから〳〵と手ぐり、戯れがてら水を掛んで庭に注いた六十年の昔が忍ばれると、夏の

風情を兄は語るのです。此の井戸の上に餅柚と呼ぶ大柚の樹が横つて居て、年々味のよい實を結んだといふ事です。

表門際の板塀に添うて『曲肱榭』といふ小高い物見がありました。窓に肱をかけて道路を眺めるのに便りがよいから竹山がさう名づけて、其額を掛けられたものと思はれますが、いつしか額は失はれて、只此の窓からはよく大名の御通りを拝見した相です。此の粗末な物見は竹山履軒共同の手工に成つたと聞いて居ります。

曲肱榭の前には、檀香梅や、空木（うつぎ）、木槿などの大木が斜に並び、其前に連翹棚が形よく造られて、四季更る〳〵花の絶えた事はなかつたと聞く丈でも學校の全盛時代が忍ばれます。入徳門を入つて右手の塀際には四方竹が瀟洒として清く茂り、岩石には蔦蘿が處得がほに塀のあたりまで這ひまつはつて居た様子は、宛然山荘の趣があります。懐徳堂で諸先哲が作られた詩中に、よく薜荔牆といふ文字が載つて居るのは此の牆の事で、それ故懐徳堂の事を薜荔窩とも呼びます。

其他重な草木は、薄紅梅、山吹、擬寶珠、芙蓉、桔梗、萱草のかず〳〵、文質の庭には紅白唉別の源平桃、詞堂の側には五六株の芭蕉、奥の庭には銀杏の喬木。西の板塀には、夏日は一面に隠元の蔓が延びて、其前の細長い地面は距離が長い爲に射的場には屈強だとて、父桐園は北のはづれに埒（らつち）を築き、巳有園の梨の根本に座を構へて射藝を練習しましたが、達人の噂がありました。

五、教授及び學校預り人の事

懷德堂では、創立の際から、學主と學校預り人といふ二つの役が重要欠くべからざる者となつて居ました。此の職は丁度今いふ校長と幹事の様な役で、學主は學事にのみ携はつて、授業上の事を統轄し、預り人は役所向の用事や校内一切の俗務を擔當して、授業をも兼ねて居ました。此の外稽古の助をする人もあつて之を助教と呼びました。教授といふのは學主と同じで、竹山以前は學主とのみ稱へましたが、竹山の學主の折、表向の届書などには學主の名を用ゐ。漢文體のものには教授と書かれたので、それ以後次第に學主と云はずに、教授とのみ呼ぶ様になりました。安政から明治の廢校の折まで、即ち舊懷德堂の最後の教授は兄の外祖に當る並河寒泉で、預り人は私共の父桐園です。

◎教授並河寒泉

寒泉は京都の並河天民の玄孫で、父の巨川迄代々儒醫を兼ねて居ました。寒泉名を朋來、又鳳來とも書きます。字は亨先、俗稱は復一、寒泉は壯年時代の號で、還曆の年から華翁と改めました。華は六十一といふ數を現はした文字故でもあり、又浪華翁のつもりでもありませう。字もよみ易く、句調もよく、意味もよいので、寒泉といふ様な淋しい氣乘のしない號は自然に用ゐられなくなつて、大抵の人は華翁先生と呼んで居ましたが、諸生達は只簡單に大先生或は老先生と稱へて居ました。晩年居を櫻宮に移されてから櫻翁に改めました。それは履軒の説に、日本のさくらは櫻の字を當てるよりも樺の

字を當てる方が適當であると、植物學上の見地から云はれた說に基いたものです。

寒泉の母は竹山の末女で、名を刀自と呼びました。竹山は女兒を多く生みましたが、何れも早世で、生き殘つたのは只此の人のみですから、竹山の爲には寒泉が唯一の可愛い外孫で、其誕生日に破魔弓といふ災難除の弓二把を祝はれた事もありました。

十七才の文化十年から懷德堂に入學して、伯父に當る碩果に從つて學びましたが、學才豐贍且勤勉家であつた爲に學業がメキ〳〵上達しましたから、碩果の鍾愛も極めて深く、丁度其頃碩果の男兒が皆夭折して繼嗣が絕えた所から、寒泉は一時養子に擬せられましたが、後並河に復姓して和泉町で私塾を開き後また學校に戻つて、碩果の歿後から廢校まで、丁度人物の乏しい時代に滿三十年間敎授として盡された恩人であります。

寒泉は一見乃木將軍の樣な風貌を備へた人で、中肉中背、頭が少し小さく、目は威嚴ある溫和の光を放ち、頰はこけて、髯は剃り落され、髮は皆禿げて數へられる位のものを、極端な國粹保存家だけあつて、毎朝娘の閏菊（うるぎく）といふ人に、一寸あまりの小さい髷を結はせて居た相です。

寒泉の講堂へ出る時の態度は中々嚴正な者で、先づ大高源吾の遺物を糢造した木刀を挾して、壯年の頃は常に九曜の紋附羽織を着け、隱居の後は無紋の逢掖を着用されました。是は初め竹山が孔子の逢掖に擬して製したものを老年に及んで着用されたのを、寒泉も之に模倣されたわけです。

寒泉は一面嚴格で、他の一面には溫情掬すべき者がありました。平生の持論に、敎育上の事、政事上の事共に寛嚴宜しきを得ざれば人を御する事は難い、と云はれたのは、能く其性格に適つた言で、講堂に於ける寒泉は良敎師として、總ての學生から敬慕せられました。總じて子供には優しく、大きい生徒、殊に塾生には品行上に就いて嚴重に監督せられたものです。

人と爲りが慷慨義烈で、大和魂とか義氣とかいふ事を日常口から絶つた事はなかつた相です。丁度其頃は幕末亂離の世で、到る處に尊王攘夷の論が沸騰して、志士活躍の噂が喧傳せられましたが、寒泉之を聞くや、座ながら拳を固めて逞ましさを示して居つたといふ事。されば、吉田松陰、賴三樹三郎、梅田梅濱などの志士の詩や歌は、得るに隨つて手錄して居られたものが二冊にまとまつたので、之を慷慨集と名づけて愛讀して居ました。

それ故四十七士の話などは大得意で、其什器を模造した種々の物品を珍襲愛玩した中でも、木刀一振其鞘に當る所に、

人切れば我も死なぬばなりません

と刻したのは大高源吾の木刀に模したもので、之はいかなる時にも其身より離さなかつた愛藏品であります。

國粹保存家だけに、西洋の物といへば蛇蝎の様に嫌つて、散髪姿で洋服など着て面會を求めに來た人

は必らず門前拂をくつたのです。當時瀧誠齋（竹山の門弟瀧蘇亭の孫）といふ儒者が有つて、中々の學者でしたが、早くから歐米の文物に心醉して、娘にも英語を習はせ、外人の門に出入させた位で、寒泉とは全く意氣込の違ふ爲に、此の二人が會談すると必らず大議論が沸騰するのです。誠齋は蹐跼の小男であるから、それを殘念さうに、出來る限り威丈高になつて、肩を聳かし、肱を張つて西洋自慢をすると、小さい髭を附けて木刀を横へた寒泉は、其雷聲を轟かして、心地よげに攻擊叱咤する、其有樣は畢竟幕末から維新の過渡期に於ける日本を、此の一小室の中に活躍させたやうな者でありませう。

◎學校預り人中井桐園

桐園名は及泉、字は公混、幼名は鮒太郎で、後修二と改めました。桐園は學校預り人であつた時代の號で、廢校後北野の本庄村に移つてから北郭野人といひ、晩年には又汲所といふ號を好んで用ゐました。懷德堂の預り人となつたのは丁度寒泉が教授となつたのと同日で、天保十一年三月廿四日、即ち碩果の歿した時からです。

之より前中井家は竹山履軒の時代から二派に別れて、竹山の系統は懷德堂を司り、家が今橋にありましたから今橋の中井と呼ばれ、履軒の方は代々水哉館を繼ぎ、家が和泉町に在つた爲め和泉町の中井と呼んで居ましたが、父桐園に至り、和泉町から出て今橋派を嗣ぎ、兩家は遂に合して一統に歸したわけです。

元來中井家は兩派とも昔から男子の寥々たる家で、其少い中の一粒種であなた和泉町中井家の嫡子は、宗家に相續者の絶えた爲に、天保三年正月から、父桐園は十才のいたいけなる身に大任を負はせられて俄かに懷德堂に起臥する事となり、碩果の養嗣子と定つたわけです。

其年から十七才まで父桐園は碩果と寒泉とに從つて餘念なく勉强して居ましたが、偶々碩果に死別するや、俄に學校預り人と定められ、寒泉は其日から敎授と仰がれる樣になりましたが、桐園がまだ弱年であつた爲、實際は寒泉が萬事を料理せられました。殊に年輩は父子の如く、舅婿の間柄でも有つたので、終世父は其支配を脫する事が出來なかつた樣です。

凡そ時の斡運に乘じて生れた人は、勞少くして功顯はれ易く、よき環境と近親の擁護によつて容易に自由な發達を遂げ得るにも係はらず、不幸にして世の衰運、家の頽勢に逢うて人と爲り、弱年のかよわい身に堪へがたい負擔を負はせられた者は、たとひ諸手を擧げて勢一ぱいの力を振つても、嵐に吹きすさまれた破屋の屋根は支へ難い者と思はねばならぬ。桐園は其六十年の全生涯を擧げて、傾き倒れんとする學校を支へましたが、氣阻み力盡きて斃れた最も薄命の人でありました。史を繙く者は、功績赫々たる達人の事蹟と共に、犧牲に斃れた至人の眞心を必ず記念すべきでありませう。

桐園の容貌は、眉は濃く上に向つて延び、目は大きく、髮は房々として多く美しかつた相です。學校預り人の間は結髮で、維新後すぐ散髮になつた所など、よほど寒泉とは違つて、よく時勢の變遷に伴

うて行く人でありました。平生弓術を嗜しんだ爲、手足の筋肉が發達し、骨格が逞しくて、よく祖父履軒の體格を受けて居た様です。

性質は温良篤實で、圭角がなく、快げに誰とでも交際をしましたが、只子供に丈は中々嚴重で、過失を赦さないので、兄は父の前で讀書する事を恐れて、いつも外祖の寒泉に學んだ相です。

桐園は日々の授業の外に、自分の日課として、讀書、習字、弓術を規則正しく修めた人で、早朝其の居間の文、質に訪なへば、必ず習字をして居る。夕方には必ず講堂の廣縁の端に卷藁を置いて射を習うて居る、夜になると、燈下で讀書をして居る聲が必ず隔ての障子を漏れて聞える。此の三つが樂しみに乏しかつた桐園のせめても心遣であつたかと思ふと、氣の毒の感に堪へない次第であります。

學校創立當時、かの五同志の人々が忠實に甃庵を助けて呉れた様に、桐園時代にも十人程顧問の同志があつて、常に力を添へて呉れましたから、桐園は始終是等の人々と親しく往來して、學校の經營を謀つた様子です。

桐園のの談話は、寒泉の様に大聲で奇抜な事をいはない代り、靜にしんみりと念の入つた話をする方で、平常酒を嗜んだ爲、酒好の人の來訪を最も喜び、共に緩々と晩酌を傾け、強ひて引留めて、床に就いてからも久しく語りあふのを何より樂しんで居た様子で、寒泉とよく論鋒を戰はした瀧誠齋も、桐園とは至極親密で、いつも來ると床中で明方まで話をした相です。

どんな寒夜でも、半鐘を聞くと、桐園は火事裝束をして、其最寄の親しい家を見舞ふ事を忘れず、死者病者の世話等にも、勞を厭はずに心から親切を盡した人でありましたが、其温い性情を、博愛慈善を尚ぶ今日の世に施さしめなかつたのは、返す〳〵も殘念に思はれます。

六、懷德堂の授業ぶり（上）

昔から懷德堂には整庵の遺戒といふものが存して居ました。其言に、講堂に出でゝ教授を司る者は、其閾を超ゆるや、役所に上りて勤務を執る者の如く思へ。といふので、代々の教授は其の言を服膺して忘れなかつた爲、懷德堂の授業は、古來一絲亂れざる秩序を保つて參りました。隨つて寒泉桐園の二人も、講堂に出る時は充分謹嚴な態度で、毎朝一定の時が來ますと、寒泉は例の木刀を挾み、逢掖をまとうて西夾の襖の前に座を占め、竹山遺物の講案を据え、烟草盆を控へて、其側には、冬ならば必ず手あぶりが用意してあります。桐園は袴羽織で、鞘の間へよつた方の中央の柱の前に座を定め、机を据ゑて、長い字つきを其上に載せ、火鉢にはいつも鐵瓶の湯をたぎらせて、其かたへに置かれました。

助教の席は講堂と中霤の取あひにある窓の下で、小さい机を控へて、別段威儀を助ける附屬物も据ゑずに、一番貧相らしく見られたとか。當時寒泉の子に蜑街といふ人が中々學才があつて助教をして居ましたが、間もなく廿才といふ惜しい年齡で早世されました。諸生はこの人を少先生と呼びました。

其前後に稻垣菊堂、山村卯之助、藤戸寛齋などいふ人々も此の職を勤められました。藤戸氏は後木積一路と名を改めて、河内芝村の石切箭劍社で久しく神官を勤めて數年前に他界されました。

授業の始まるのは毎朝八時頃で、三教師が講堂に出揃うた處で、早くから玄關に待つて居た通學生は、其正面に積んである書臺に本を載せて、順々に講堂へ這入つて、或は寒泉に、或は桐園、助教にと、其學ぶ科目に依つて定まつてをる教師の前へ出て、一禮をした後教を受けて居ますと、又次の人が書臺に書物を載せて側へ來て、待ちながら昨日の復習をして、それからそれへと順々に詰めかけ、更る〳〵教へられて、覺束了ると、教師の許可を得て退きますから、生徒は更代しても教師はかえられぬ故、全くどの教師も寸隙すらない有樣でした。

當時教授の科目は、素讀、講義、質問、習字、背誦、詩文の六科。入學者は是等の中で其望むもの丈を撰修しても、全部を兼習しても隨意でありました。其の教授の順序は左の通りです。

初學で入學した人には先づ素讀から授けます。受持教師は桐園と助教とで、生徒の年齡は十才位から二十五六才まで故、今の小中大學を兼ねた樣なものです。素讀に用ゐる書物は、千字文、孝經、大學、論語、孟子、中庸、小學、易、詩經、書經、禮記、といふ順序で、無論級など設けず、學力に應じて個人教授を行つたのですから、其進歩の遲速も一樣ではありませんでした。

素讀が一通すむと、復初から繰返して講義を聞かせます。此方の受持は重に寒泉でした。講義も素讀

の通りの順序を踐み、自修をする者は、經書と歷史と交替に質問させる事になつて居ました。自修の書は、日記故事、蒙求、十八史畧、國史畧、近思錄、左國史漢といふやうな次第です。學力がつくに從つて此の通りに自修を奬勵したのは、此の時代での進歩した教授法であつたと思ひます。

午前の授業は、三教師が皆講堂に出揃うて嚴な樣子でありますが、午後からは來學者も少い爲、講堂を退いて、寒泉は平常自分の客間に充てゝある西夾に座を構へて、質問の生徒が來るのを待ち、桐園は鞘の間の西部で講義をしたり質問に答へるのが常で、此に渾天儀を据えて書經の講義をして居られた樣子が目につくと兄はいつて居ります。

此の鞘の間の東部には童子の一團がゆつくり座を占めて、小机を向ひ合せに澤山ならべて、讀書或は作文と思ひ〳〵勉強をして、子供に似合はぬ落付いた研究ぶりでありますが、惰け者も遊び半分の手習を樂しみ、いかなる日も登校を怠るものは無かつた相です。

午後の習字は見張の教師もなく、勝手に習ふ定めですから、子供達はワイ〳〵騒ぎながら、習ふといふよりは寧ろ草紙を濕して居る者の方が多い位で、中には玩具まで持ち込んで來て半分遊んで居る者もありました。餓鬼大將は早野橘隧の孫で父桐園の姉の子である常童といつた人で、其特長の滑稽を演じて、いつも衆童子を抱腹絶倒させたものです。當時懷德堂では、子供には皆童●といふ文字を添へ、成年者には公●の字を添へて何公、何童といふのが習はせでありましたから、常童〳〵と呼ばれて、ど

んな場合にも子供の中で幅をきかせた者でしたが、當年の常童、廿年前懐徳堂の祭典の頃には還暦以上の老齢を以て甚く其盛擧に感激して居りましたのに、今や此の人も亦故人となつて久しい事になりました。

七、懐徳堂の授業ぶり（下）

さて習字の方は、前にいつた様に机を並べ、一々寒泉或は桐園から自筆の手本を貰つて、最初は「いろは」から數字、十干、十二支、千字文、それから書簡文や草書と順々に習ひつゞけ、草紙一冊を習ひ畢ると、桐園の前に出て改めて貰ひます。旨く習つて賞められる人もあれば、水を流して往つて叱られる惡戯者もあります。清書は五日目で寒泉の手本を習うた人は寒泉に、桐園のを習ふた人は桐園にと其清書を差出すと、朱で直されたり、丸を附けられたりして返され、それと共に新しい手本を貰ひます。寒泉はいつも紅欄紙といふ紙を用ゐ、桐園は美濃紙、或は半紙を用ゐました。

鞘の間の生徒が朝から習字を飽きる程やつて居る内、素讀や講義を習ふ生徒が、皆濟んで歸つても、まだ正午にも早いといふ時に、子供は代り〳〵桐園の前に出て蒙養篇を少しづゝ習うたり、背誦の復習をしました。蒙養篇といふのは、竹山が少年の爲に候文で解り易く書いた修身書で、苦なしに覺えられましたから、今の子供が教育勅語を諳んじてをる様に、誰も知らない者はなかつた相です。背誦は今の暗誦で、竹山の撰んだ背誦といふ本が一冊あります。其中には、兩儀、陰陽、二親父母、

三才天地人、四時春夏秋冬、といふ風に、悉く數字で記憶し易い樣に、天文、地理、節序、人事、歷世、官職を集めたものを少しづゝ諳誦させるので、次第に熟達して教師の前に出てもすつかり滿足に云へると卒業で、筆墨を褒美に授けられ、次には他日詩を學ぶ時の準備に唐詩選の背誦を課せられますが、之は五絕から七絕まで位が普通で、中には律や古詩を諳誦する者も稀にはありますけれども、其內に大人の部に這入りますから、こんな子供らしい科目は自分で止めて了ひます。併し無趣味で覺えた背誦が、却つて其記憶を確にして、後日の益をなした事は中々慢り難いものだといふ事です。

詩文の科を學ぶ人が一番少い樣でした。詩は作るにも困難であるし、實用がない爲、自由選擇に任せ、他の科目の樣に嚴重に課せられてありませんから、特別熱心な人でなければ學ばなかつた相です、併し其研究の順序は、初學者には幼學便覽、詩語碎金、詩礎階梯、などに據つて題を與へ、上達するに從つて自由に題を選んで作らせる定めで、出來た詩稿には一々添削を施して與へましたが、稀には匿名で作らせ、それを一冊にまとめて差出させ、添削の上、甲乙の點を附して、最上點を得た人に其一冊の詩稿を與へる事もありました。

文の稽古は皆漢文ばかりで、初學者には復文といふ事をさせました。復文は原文といふ小冊子から片假名まぢりに書き下したもので、原文は漢文書籍の中から、面白相な事蹟を拔粹したものであります。生徒は其譯文を一題づゝ漢文體に書き直して出すと、教師は原文の方を手許に控へて居て、それと見

比べて誤を正し、錯誤幾つとか、倒置幾つとか記して返されます。此の練習を重ねて復文を一冊作り終ると、次は記事文を課せられます。記事文は常山記談とか乘燭談とか、全く國文體に書いたものを用ゐましたから、之を漢文に改作する事は初學者にはよほどの困難で、或は長きに過ぎ、短きに過ぎ、詳略宜しきを得ずして、添削の施すべき方法もない程拙劣なものを出す人もあり、此の場合は俟改構と記入して返されます。兎に角記事文は總ての基礎でありますから、之の熟達さへすればよほどの進歩が見れたものです。

定規の六科は畧々此の通りの教授法を執つたのですが、尙一つ漢文の讀方に就いて一言せねばなりません。

懷德堂では、古來素讀を教へるのに、世間一般の送假名は冗長に過ぎて漢文の練習に害があるといふ見地から、出來うる限り簡潔な訓點を付け、讀方一つにて漢文の結構まで吞み込ませる方法を取りました。四書に懷德堂風の點を施したのを春樓点と稱へて世に行はれてをるのは、三宅春樓の定めた讀方であります。竹山の意見は少し春樓と違ふ所があつて、亦一家の説をなして居ります。其定めた訓點の中『國讀刪正の小學』といふのは已に上梓せられてをりますが、竹山以後は專ら其讀方を墨守し、寒泉に至つて一層極端になり、送假名を益々省畧するやうに勉めました。

竹山の改めた訓點中一二の例を擧げますと、普通の讀方では「爲(タメニ)レ人(ノ)●所(ル)レ欺(カ)」と讀ませる所を「爲(ナル)ニ人(ノ)●所(ト)一

欺(ク)」としてあります。是は前の讀方に從ふ時は被(ル)欺(カ)となりますが、發聲の上で之を聞く時は見(ル)欺(カ)にしても別段異る所がないので、漢作文練習の上に効果が擧らない爲、殊更「所」の字を用ゐた理由を記憶せしめる目的で爲(ル)ノ人所(ト)欺と讀ませたのであります。

「而」といふ字も、普通は「從而學焉(テ)(ブ)」といふ風に「て」とよませますが、懷德堂では「而(しかうして)」と丁寧によませて、作文の際「而」の一字を脫せぬ樣に豫防法を設けた次第であります。

然るに寒泉に至つては更に甚だしくなり、漢字の形容詞に屬する助動詞までを省いて「窈窕淑女君子(ヲ)(ヲ)好逑。」などといふ所のタルをも無益として除くやうになつた相です。

水哉館の讀法も畧懷德堂のと同樣で、只少し緩やかな文であります。要するに、餘り漢作文の利益といふ事のみに重きを置いて、國文法を無視した咎は免れられないと思ひます。

八、講筵及び輪講

懷德堂では、創立の際一般公衆の爲に日講を開かれた遺風が永く傳はり、其後全く學校組織になつてからでも、月に數回は別に講筵を開いて、公衆の益を謀る事を繼續し來つたのであります。其講會日は、一六或は三八の夜であつたとか、來聽者は寮の寄宿生もあり、通學生もあり、社中同志といふやうな生徒以外の人々もあり、多種多樣でありました。

さて其晩は、玄關と東房の間、東房と講堂の間にある襖を皆取り外して、三室通じて大廣間と爲し、

あまたの聽聞者は左右兩列に居流れ、其前には十五六の燈臺、即ち後の臺ランプ（此のランプは石油の代りに種油を用ゐた丈が日本式で眞鍮の油入を載うてゐる瓜形のほやで、も太い竹の柄でも西洋の新式のものである）が煌々と光を放つて居ました。こんな時代に、此樣な珍らしい新式のランプを十五六も揃へて、此の舊式の講堂へ輸入したのは、全く父桐園の計らひて、貴重な此の品には誰も手を觸れる事を許さず、掃除から取扱まで皆一人で引受けて居ました。西洋ぎらひの寒泉も流石に此の便利で珍らしいランプを用ゐる事だけには異議がなかつたと見え、其前に坐して、いつも講座を一人で擔任するのでした。時刻が來ると、寒泉は例の逢掖姿で講堂に現はれ、床の間の前に備へられた大見臺の前に端坐すると、聽問者は銘々携へて來た書物を前に廣げ、謹んで身構へをする、やがて寒泉は眼鏡の曇を推し拭うて、悠然鼻の上にかけ、少し上目を使つて聽衆を一わたり見渡し、それから兩手を正しく膝の上に置き、滿座にひゞき渡つて一丁以内にも達するといふ破鐘の樣な聲を出して少しづゝ切のよい處まで讀みては講じ、讀みては講しました。經書なら、先づ最初に、孔子の仰せらるゝには、と徐々に說き出して、聲は一句〳〵と益々大きくなり、切れる處には一層力を入れ、必ず講義の終には今一度末の句を小聲で讀み直して止める、といふ風です。

用書は經書と歷史を更る〳〵用ゐましたが、いづれの講釋にも特長が有つて、經書の方はひし〳〵と胸に人道の奥義を刻みつけられ、歷史は亦一入興味深く、殊に逸史の講義が大得意でありましたから、丸で軍談師の談をきく樣に、否實地戰場にでもある心地がして、聽衆は手に〳〵汗を握つて聞きつめ

て居た相です。それ故講筵の定日には、皆豫め其生氣に滿ちた講釋ぶりを想見して、早くから推しかけて來て、堂々たる講席と、燈臺のまばゆき中に、己れを忘れて聽き耽つて居る樣子はさすがに百幾十年を經過した學校の重味が現はれて、まだ十年も立たぬうちに廢滅に歸すものとは、到底夢想する事も出來なかつたでありませう。

●●輪講は四九の日が定日で、午後に講堂の床の間の前で行はれました。催主はやはり寒泉で、西夾の前で、鞘の間に向つて坐し、輪講者の見臺はそれから一間ほど離れて寒泉の方へ向けられ、聽聞の生徒は其右の横手に床の間の方に向いて一二列に坐して居ります。その列の中から、輪講者は一人づゝ書物を携へて、中央に備へてある見臺の前に坐し、順次に讀み且講義をすると、寒泉は聽き終つてから其可否を批評するのだといふ事です。

九、詩會及び文會

詩會は毎月廿五日に鞘の間或は中雷で開かれ、多くは夜分でありますが、時には午後からの事もありました。司會者は桐園、時として寒泉、桐園兩人の事もありました。來會者は社友と呼ばれた門人以外の同志の人々が重でした。併し學寮に居た年長の生徒は、其席に加はる事を許されて、共に枯腸を絞つて一二首を得、席上其償として酒肴のもてなしに與りましたが、まだ弱輩で詩席に列り兼ねる者は、題だけを與へられて、自分の部屋に居ながら、身分相應の馳走に預りつゝ、詩集と韻書にかぢり

ついて、漸く一二首位得られたのを詩席に携へ行く時は、何とも云へぬ得意と喜を感じたものだ相です。

文會は毎月五日の午後で、酒ぎらひの寒泉が司會者ですから、此日の饗應は茶菓のみです。來會者はやはり詩會の人々と同じで、只頭數は大分少なかつたので、詩會ほど盛には見ゑなかつたといふ事です。寒泉の客間の西夾で行はれ、社友と呼ばれた人には西夾に、門生は中霤に居並んで居ました。文題は記事文が多く、記、序、說などが出る事は少なかつた相です。

十、學寮の事

竹山の頃は五舍の一棟に寄宿生を收容しましたから、少くとも二三十人位置く事が出來ましたが、安政以後は校舍內に寮生を置きましたから十人以上は迚も收容する事がむつかしい有樣でした。寮の生徒は長幼定りなく、別に寮長といふものもありませんけれども、助敎の並河蜑街が自然監督の有樣でした。

蜑街はいつも東寮の緣に面した處に文机を出し、萠黃の木綿羽織を着て、端然と容儀を正して書見をして居た樣子を見ると、色白く面長の凜とした武士風の美男子で、宛然物語に見ゆる人物、或は畫中の人であつたといひますのに、其餘裕のない勉强は、遂に不起の病を釀して、天稟の才能を完成せずに終らしめたのは、獨り其父寒泉のみの恨ではなく、亦懷德堂の爲にも少からざる損失であります。

學寮では時間で日課を定めず、思ひ〳〵に讀書作文などを自修するやうになつて居ました。總體に懷德堂の書生は品行正しく、靜肅で、勉強家が多かつた相です。其頃世間の書生は、無闇に議論を鬪はせたり、大手を振て大道を吟發して歩くものが多かつたといふ事ですが、懷德堂では之を禁制してありましたから、外出の際でも、人が一見して懷德堂風と稱へた程目についた相です。殊に品性を高尚に導く事を主要の義務としましたから、竹山の掲示にも、「倡街を履む事勿れ、劇場に登る事勿れ。」といふ戒もある位で、學生は無論、家族の者でも之を犯す者は一人もない所に、或夜數名の寮生が外出して、門限すぎてから遲く酩酊して歸つて來た爲、一圖に惡場所へ往つた者と寒泉に誤解せられて、非常な譴責を受けた相です。其時の聲は校舍も張りさける程恐ろしかつたといふ事で、こんな事件は後にも先にも只一回きりて、風紀は忽ち振肅された相です。

十一、授業料及會費の事

總ての學生の授業料は、新年と中元の二期及び三五九の節句前に納め、寮生の食費は毎月其時の相場で一日白米一升の割合、授業料は制規を設けず、二朱、百疋、二百疋、稀には白銀一両といふのもあり、生徒が隨意に携へ來て、寒泉に學ぶ者は寒泉に、桐園或は助教に學ぶものは桐園に差出したのを其儘收めた丈であります。さて寒泉の方は其授業料を悉く自家の私用にあてればすむわけて大に餘裕がありましたけれども、桐園の方は其收入の中から大きな學校を支へ、一切の費用を持ちきつた外に、

自分の家族と助教を養ひ、更に並河全家族をも負擔せねばならぬといふ窮狀に置かれたので、たとひ同志の寄附金は多少有つたにもせよ、其苦境を察するに餘ある事です。寒泉有つて近代の懷德堂は其價値と重みを落さなかつたのですから、これ位の待遇を望んだのは至當かも知れませんが、吾人をして、更に其上を望ましめば、何事にも自家本位であつた素性を離れて、祖父竹山の如く無邪氣にして磊落、履軒の如く高邁にして寡欲であつたならば、更に其德を慕はれて、人物の大を致したでありませうに、事此に出ですして、學校維持法の如きも、一切之を桐園に委ねて顧みなかつたのは、校運を日に否ならしめた所以ではなからうかと、心潛に惜まるゝ次第であります。

十二、休業日の事

定まつて居た休業日は、冬期は師走廿日より正月十五日まで、夏期は六月廿日より七月廿日まで、外に毎月五、十の日、五節句、七夕、中元、八朔及び氏神の祭禮等で、五、十の休日には朝食後に桐園が必講堂の定つた席に坐して、寮生を呼び集めて「定」といふものを讀みきかせるのがきまりでありました。是は竹山が學生を戒める爲に記された教訓で、左の通りの者です。

定

一、書生之面々互に申合せ行儀正敷相守り假初にも箕踞偃臥等致間布事

一、學談雅談之外無益之雜談相愼場所柄不相應之俗談堅く可爲停止事

一、口病持病等之子細も無之分宜晝寢宵寢堅可爲無用事
一、本業出精之暇には手跡算術詩作譯文等銘々之分相應に心懸候て間斷有之間布事
一、休日の外閑暇之節に和漢之軍書並に近代之記錄物等心懸讀可申事
一、碁象棋謠等は世之交り並に學業退屈之氣を轉じ候爲に兼て差免じ有之候へども休日之外は晝迄の內右樣の雜藝に懸り候儀可爲無用候事
一、銘々行屆不申候事は同輩之內より互に心を添切磋可有之事
一、人之切磋を受却而立腹抔致候はゞ傍人より早々其段可申出事

以上

安永七年戊の六月

休日閑暇の折に和漢の軍書を繙けといふ事は竹山の遺戒で、寒泉も桐園も之を奬勵しましたから、平常窮屈な經書の研究などで疲れて居る人々は、休日を幸ひとして、貸本屋から保元平治物語、太平記、太閤記、漢楚軍談、三國史のやうな軍記ものを借覽するのを無上の樂として、中々盛に流行した相です。

十三、懷德堂社友並に門生

社友とは一面には今いふ學校顧問の如く、一面には教授及び學校預り人の私交上親しい關係のある人

々の事です。安政以後の社友の人名錄から、殊更力を學校に盡された人々を拔粹すると左の十名位です。

平瀨市郎兵衛、同龜之助、山形平右衛門、井上市兵衛、加藤喜太郎、森三壽、堀用菴、玉手棠洲、同菊洲、井坂禮太郎、

門生の名も澤山ある內、岡本隆吉、同要治、市村住之助、荒井公木、稻垣菊堂、山村卯之助、藤戶寬齋、森敏藏、本尾敬三郎、濱崎康、河原次官、年梅寬之助、河村可守、加藤文太郎、清水甲太郎、石山要機、宮崎寬藏、鱗星助太郎、高木彌一、萱野延太郎、弟三次郎、近藤米次郎、大町彈正、愛甲光治、並河總次郎、早野常次郎、同元吉、澁谷邦之助、馬塲庄太郎、及び其三弟、馬塲平三郎、松本文二郎、神山鈐吉、弟九八氏等三十餘人を記憶して居る相です。今其中から、懷德堂に緣故の深かつた人々と、僅に現存して居る人の小傳を擧げる事に致します。

岡本隆吉

此の人は元は銅座の役人で、奉職しながら通學生として久しく寒泉に從學し、中々學才もあり情誼も厚い人で、學校廢滅後も並河の門には始終出入してよく世話をせられた相です維新後造幣局に勤め、顯要の地位に居て、明治廿七八年頃物故せられました。

稻垣菊堂

此の人は河内久寶寺村の醫師見隆氏の長男で、母照子は竹山の子蕉園の娘に當ります。それ故自然外祖父の天才を受けて、利發な學力に富んだ人で、少年の時から懷德堂に入學し、後助敎を勤め、退學後は專ら醫學を修めて家業を繼ぎましたから、儒醫いづれにも通じ、其上吏務にも長じて、維新後は堺縣の學務課に奉職し、或は郡長にもなり、晩に再び家業を起して其歿年に至つた人であります。平常深く學校の廢滅を嘆き、終世懷德堂諸先哲を追慕する心を絕たなかつた事は、生前家兄に寄せた數十通の書簡の中に流露して居ります。あゝ此人をして今日懷德堂復興の日にあはしめたならば、其感慨果して如何ばかりでありませう。

藤戸寬齋

此人は後木積一路と改名し、河内の石切劍箭神社の神官となつた人です。早くから懷德堂に入學して天才の有つた上に勤勉家で、上達も非常に早く、當時の學生中錚々たる者でありました。それ故久しく助敎として學寮に起臥し、廢校當時まで寒泉桐園と共に盡された功勞者であります。人生は三十年にして大變するといふ語もある通りに、一たび廢滅に歸した學校は、志篤い大阪人士の力によつて、四十餘年の後に復興せられ、檜の香匂ばしい新築校舍の講堂の壇上に於て、奥深く齋き祀られたる懷德堂の先師諸賢の神主の前に幾度か祭典掛として奉仕せられたのは、いひ知らぬ喜びであつた事と思ひます。あゝ此人も今は已に故人となつてしまはれました。

森敏藏

敏藏は懷德堂に通學の頃の幼名で、後訥と改名されました。父三壽氏の時代から懷德堂の社友で、訥氏は更に忠實な門人として第一に指を屈すべき人でありました。醫が家業でしたが訥氏は之を嫌つて、幼年の頃から懷德堂に學び、廢校當時まで根氣よく通つた人であります。頭腦明晰、且驚くほど博覽強記で一度見聞した事は何十年を經ても決して忘却する事はなかつたといひます。其上懷德堂諸先哲を崇敬する心が深く、平常學校の生命を其腹中に置き、口を開けば必ず學校の事に言及せざるはなかつた位、それ故廢校後家兄に寄せられた幾束もある書信は皆此の意味で滿たされ、深く學校の末路を悲しみ、之を再興する時なくして日に〳〵世人に忘れられんとする事を嘆じて居た忠誠の人でありましたが、程なく故人の數に入つて共に今日の喜を語る事の出來ないのは痛ましい事です。通語注解及び漢和中辭林は其遺著として存して居ります。次に現存して居る數人を擧げれば、

大町安敬、氏は大阪天滿宮の社家で、學校へ通學された頃は彈正というて居られました。少年の頃は色の白い美少年であつたとか、今は八十才位になられた事でせう。其當時稚子の虫ねらびか何かの繪を書いて貰つて喜んだ事があると兄は申しました。久しく目を病んで居られますけれども、記念會には必ず出席せられます。

澁谷邦之助、氏は慶應三年十二月三日に其弟儀二郎と呼ぶ少年と共に入學、同日親戚の和田千代太郎

と弟源二郎二組の兄弟が入學したので双方の父親が大に之を喜んだといふ事です。澁谷氏は久しく淀屋橋筋で眼鏡店を開いて居られましたが、今は閑散の身となつて餘生を樂しんでをられます。

松本文二郎、氏は慶應四年八月九日に兄上端氏に伴はれて入學されたのですが、あんまり小さくて、勉強をしたといふよりは學校の門前の用水池の處で遊んだ記憶より外殘つて居ないと、話されましたが、それが奇緣のつながりにや、後日舊懷德堂の遺跡に建築せられた日本生命保險會社に勤務の身となつて、若い僚輩の前に威儀を作つて居られても、靈は常に昔の用水池のあたりに馳せて居た事と思はれます。

神山鈴吉、氏は神山靱負の子息で、今は故人となられた幼弟九八(粥川八郎氏)と共に慶應四年九月十一日の入學です。東脩金二分、並河中井兩家にも在學生にも大饅頭を贈られたと寒泉の日記にあります。色白の美少年で、頭髮を紫の打紐で茶筅に結つて居られたといふので定めし衆目を牽いた事と思はれます。今は堺の方違神社の神官で、職掌柄、懷德堂の祭典には毎年係員として奉仕されます。

十四、春の懷德堂

◎長閑なる新年

只一夜明けたばかりに春めき渡る新年の長閑さは、四海の果まで變りがない中にも、懷德堂の新年は

亦一入のごやかで、優雅で、奥床しい面影が見られます。先づ例の講堂から玄關までの取あひの襖を皆外して、見渡すほどの大廣間に見せ、床の間の正面には、竹山の「詠福壽草」の書幅、右手には「於萬斯年受天之祐」といふ履軒隷書の一行物、右には蕉園賛の壽老人に鶴の圖幅を掛け、置物を二重段の黒塗の臺の上に模造の富士香爐をのせ、下の段には梅に福壽草の盆栽を置くといふのが毎年定つて居た裝飾であります。

それから講堂の北隣の西夾の柱の傍から玄關の隅まで、一列に先哲遺墨張まぜの大屏風を二雙ずつと引のばして立て廻した様子は、見るから莊嚴の氣に打たれた相であります。此の大屏風は石庵蘭洲以下諸先哲の遺墨、或は竹山履軒が他の文士から送られた書牘詩文の様なものを頒果が撰び集めて此二雙に作らせたので、中にも履軒賛の東坡像は見ても見あかぬ所から、子供心に兄はそつと之を敷寫しにしようとして東坡の目に墨を着けた相ですから若しこんな墨附の東坡の畫が發見せられたら、それは此の大屏風のに違ひないと兄は證明して居ります。

さて玄關には、まだ暗い内から、何時多勢の賀客が襲來しても差支のない様に、青銅の大火鉢に烈火を盛つて、炭の音はコン〳〵と絶えず賑はしい勢をつけて居ります。其前に塾生が二三人づゝ机を控へ、名刺差を置いて年賀の客を受けて居る様子は、どことなく勇氣と希望に滿ちた顔色でありました。講堂でもやはり二三の青銅の火鉢に火を絶さず、其側には烟管附烟草盆まで備へて、學主寒泉は禮服

姿でキチンと西夾の前に座して、いつも賀客を受けて居ました。

兄黄裳が七才の春を迎へた元旦、父が祝にとて拵へて呉れた根引松模様の振袖に平袴を穿つて、楓の様な両手をついて、寒泉の傍で年頭の客に挨拶をすると、寒泉は誇りかに、之は私の孫で御ざいます、と來る人毎に一々紹介せられた様子は、猶昨日の事の様に歴然と記憶して居るのに、はや七十年の昔となつて、人も處も變り果てた今日、只一條の悲しい追憶をたどるのみである、と聞いてはさもあるべしと、涙ぐまれるのであります。

賀客を受けるのはいつも寒泉の役で、桐園は校内打揃うて朝の祝をすました後、すぐ衣を改めて、役所向及び其他交際ある家に一々廻禮の爲に出かける定でありました。

門松注連飾も戸毎に見られましたが、懐徳堂では門前兩側に盛砂をする斗りで、專ら武家風の故式に從うたのであります。

◎初會及び夜宴の賑はひ

懐徳堂では、新年の授業初の事を昔から初會といひならはして居ました。安政以後は例年十六日が初會で、此日は通學生も寄宿生も歳晩から指折り數へて待つて居る喜悦の一日でありました。通學生は早朝から盛裝で登校すると、寒泉桐園助教等はいつもの席に出て、儀式的二三行宛教へ、生徒の携へ來つた書初の良否をいひ渡す丈で、其あとは各欲するまゝの娯樂を盡す事を許されてありますから、

大抵は紙鳶上げの競爭に手の疼ねるのも知らず遊び耽つてをると、やがて生徒一般に午餐の饗應があります。此日雇入の料理人は早朝から厨屋に這入つて、音にぎはしく調理に取かゝつて居ると、一方では茶の間に膳棚を多く立て列べて、碩果以來學校に備つて居た立派な膳部が幾組となく其上に用意せられます。其日の馳走は今なら二三圓に價する位で、現代の學校では迚も見られない程贅揚なやり方でありました。

生徒は腹皷をうつ程美味に飽きて、再び遊戯に耽り、猶あき足らぬといふ風情で、黄昏時になつてからそろ〳〵解散すると、丁度入れ代りに夜宴が始まります。集る人は例の社中の人々を初め、平生親しく往來して居る限りの人で、間もなく講堂も鞘の間も犇々つまる程になると、其間に酒肴が處せきまで取出だされ、陶然と醉の廻つた頃には、此かしこで詩畫の揮毫が始まり、謡曲を歌ひ出すなど、益々酒宴の景氣を添へ、春ののどけさは此の廣い校内に滿ち渡るほどで、其打とけた睦ましさは此の夜宴に勝るものがなかつた相であります。

◎竹山の忌辰

毎年二月五日の竹山忌辰には、中井家では午前に祭典を行ひ、寒泉は午後西夾に竹山の肖像を掛け、茶菓を供へて、社友や寮生を集めて竹山の逸話の數々を話すのが例でありました。

◎寒泉七十の賀

ある春の事、寒泉が古稀に達した祝にとて、社友や門人から様々意匠を凝した贈物をした事がありました。例へば壽老人の杖に擬した巻物附の杖、其巻物の内部は緋縮緬で、表張は錦。それから陶器製の鶴の菓子入に鶴の玉子に擬した菓子を盛つた者などは其中の粋を極めたものであつたとか。桐園は盛大な賀宴を開いて、其壽の長久を祈つた折しも、一方に謡ひの聲が起ると、社友の玉手菊洲氏が音のどやかに鼓を打つ、之に勵まされて、來客の一人がやをら立ち上つて東房に出て、一さしの仕舞をまひなどして、興味の更に加はつた頃、無藝の先考が負けじと勇み立つて、何物をか恭しく捧げて現れたのを見ると、黒塗の大盤の上に白砂糖を高く盛つて富士山をあらはし、海の眞砂になぞらへて、其麓にゆで小豆をあしらつた様な心地よいものを捧げて、おやゝかに挨拶の言を述べた後、其分前を一皿づゝ座客に分たれたのは、例になく旨い趣向であつたと、人々に賞めはやされた相です。

◎雛まつり

昔は五節句とも新年の様に來賀廻禮をしたもので、上巳の前後三日間は休業で、講堂には其日につりあひのよい裝飾を施して寒泉が賀客を待ち受けて居ると、其間に桐園は例の如く廻禮に出かける。奥の間では、屏風引き廻らして、女兒の爲に立派な雛壇が出來て居ります。此日ばかりは奥の賑ひが男子の爲には羨しく感せられたでせう。

◎春の已有園

上巳の節句には、必ず講堂の庭に咲き初めた梨の枝を手折つて瓶に挿んだものです。其頃から、學校の已有園は次第〳〵に百花芳を競ふ賑ひを見るので、休日などには縁先近く出で、思のまゝの遊をなし、又園中を漫歩して、薄紅梅の落花を糸にさして其丈の長くなつたのを誇りあひなどしたのは幼い學童達の樂しみ事で、大きい學生の爲には、先に懐徳堂の園庭の處で陳べた様に、梨の盛と櫻の盛には、「庠園梨花」或は「庠園海棠」といふ題で、毎年二度づゝ開かれる詩宴に過ぎた樂しみはなかつたといふ事です。

十五、夏の懐徳堂

◎端午の破れ腹巻

此の節句にも前後三日間の休業で、賀客の往來した事は前と同様です。桐園は此日その書齋の床の間に、毎年兄の爲に五月人形を飾つて、柏餅や粽の供物をせられました。併し其人形、實は武者人形ではなく、履軒が百世の子孫にとて遺し置かれた千切〳〵の腹巻です。兜は鐵の烏帽子形で、之も甚く破れて錏など見る影もない様なものですが、履軒は此様な腹巻一具をどこから得たものか、鎧櫃に深く藏めて、其蓋裏に書き遺された破れ腹巻の記といふのが添へてあります。其意味は、萬一他日國家に事起らば、吾が子孫たるもの必ず此の破れ腹巻を着て初陣の功を奏し、且敵將を斃して、其よき鎧

を奪つて己れの有とせよ。若し之を危まむものは吾が子孫と頼むにも足らねば、宜しく之を賣りて鋤鍬に代へ、文事を擲つて農に就くべし。といふので、履軒幽人中井朝臣、百世の子孫に告ぐ。といふ宛書であります。國家と子孫を思ふ忠誠の眞心は此の厚い戒の中に彷彿として見られます。

さて端午の飾としては、竹山の足高の大机を床の正面に据ゑ、其上に兜を載せ、下に腹卷を置き、床板に其草摺を打掛けて兜を被つた體に見せ、右手には白木の大幟臺を置いて三旒の絹幟が其上に飜つて居ります。之は兄の初節句に寒泉が手づから書き與へた者て、右のは朱筆で、「菊水分派揚吾文敎之芳波」といふ句を、左のには、「蒲酒在甕自熊罷之甘夢」と墨痕あざやかに題せられ、中央のは橘の紋の下に菊水をあしらつた圖で、之は橘が中井家の姓で且男子の定紋であり、菊水は楠氏の末裔である事を示した者であります。

其他に弓矢、太刀、法螺貝など男々しい物を並べて、床の間の天井からは藥玉が美はしい長い房を垂れて居ります。之は兄の初節句に、加藤竹里の孫景賢といふ人からの贈物であります。竹里は竹山及び蕉園の和歌の師で、子孫に至つても社友として親しく往來して居ました。藥玉の箱の裏には、「しら糸のみだれぬふしを色に染めためしをかけて契る玉の緒」と一首の歌の記されてるのを見ると、藥玉はあせても、玉の緒の契りは今も盡させぬ名殘を見る事が出來ます。

◎蟇蛙の行列

夏期休暇中は、廣い講堂にも鞘の間にも全く人氣のない上に、已有園の樹木が茂つて寺院の様な涼しさを感ずるので、桐園はいつも午後には鞘の間に曲彔を据ゑて、園中を眺めながら午睡をした様です。行水後の夕涼には、寒泉が碩果の遺物である朱塗の烟草盆をさげて、此の廣縁に端居して居ると、拜賀の群臣が朝廷に伺候でもする様に、門前の用水池に棲んで居る數多の蟇蛙が、門脇の曲肱樹の下から列を立てゝ恭しく這入つて來ては此かしこの草蔭に分列して、様々の藝當を演じつゝ此を天下と徘徊して居る様子は眞に深山の詫ずまひ其まゝの光景です。

◎懷德堂の曝書

夏の懷德堂は曝書が中々の仕事となつて居ました。毎年定つた日が來ると、未明に起きて、桐園の指揮の下に寮生が文庫から數多の本箱を毎日講堂に運び、講堂、鞘の間、東房の三室を通じて、書藉を一杯廣げた様子を遙のかなたの奥の間から見渡すと、靜な海に白浪のゆるく立つて居る様な趣が有つたとか、夕方には是等を本箱に藏めて、再び文庫に運び、書藉が一通すむと軸物で、丁度十日餘りを費す相でありますが、書生達は炎暑の苦しみも忘れて、平常見なれない書物や幅を珍らしげに眺め入つて、拾ひよみなどする事を樂しみの一つとして居りました。

十六、秋の懷德堂

◎梨ひろひ

夏の末から初秋にかけて、廿露滴る已有園の梨の實の熟する時を、大人も子供も皆樂しんで待つて居ります。烏が一つ二つ喙み落したのでさへも我勝に爭うて拾ひに走る程ですから、嵐でもあつた夜中に、其すさまじい音と共に、ばた〳〵と地に落るのを待ち設けて、寮生等はまだ暗いうちから目を覺して、手桶をさげて拾ひに行きます。其味の旨さは忘れられないといふ事で、去來の落柿舍も此の樣であつたかと聯想されます。

◎八朔及び重陽

此の二節も休業で、やはり來賀廻禮を盛にやつた相です。重陽には、講堂の床の間にはいつも解侯伐、袁の圖に履軒の賛ある大幅を掛けて、詞堂の庭に芭蕉の花が盛に咲いて居るのを、父が瓶に挿む事になつて居ました。

◎茸狩

茸狩は毎年必ず箕面でした。桐園が寮生をつれて、其頃萱野村から來て居た三平の子孫である萱野延太郎氏の邸に落ちつき、數日そこに宿泊して箕面へと出かけたものです。星移り物換つて、懐徳堂も廢れ、萱野の本邸も取拂はれてしまつたのを、懐徳堂の記念祭が始めて行はれた二十年前の其年から、同村有志者の力で同字へ遺跡も修覆せられて、今は大に面目を新にするに至つた事は互に奇縁ありといふべきです。

十七、冬の懐徳堂

◎親しまる、冬の課業

燈火親しむべき冬の長夜は、讀書の聲も諸生の心もシンミリとして、夜講などは殊更盛に行はれた相で、心を動す娯樂も絶わた冬の課業は、一番眞面目にスラ〳〵と捗取るうち、十二月に入ると鞘の間の學童たちは來年の試筆の手本の出るのを樂しんで居ます。十二月十日は毎年其手本を渡す日でありますから、前以て寒泉は例の紅欄紙に五絶一句を大字で書き、末に何々元旦試筆と書き添へ、桐園は、どうさ引の唐紙にたつぷり墨を含ませて、之も五絶一句を書いて、各其書を習うて居る者に與へると、我こそ人に劣らぬ書初をなさうと、不斷惰け勝の生徒も、此半月間は口もきかずに勉強したものです。

◎煤はらひ

十二月廿日から毎年冬休で、廿二日が煤拂の定日です。此日は寮生が面白半分に働く日で、廣い校舍も其爲たやすく掃除が出來上つてすが〳〵しくなつた中に、迎春の用意がまづ調うた事でありませう。

◎餅つき

廿五日は餅つきです。前夜から泊つて居た餅搗の雇人は、一番雞の聲と共に目さめて、大かまどの下を焚くと、一方では米の用意をする。いよ〳〵幾蒸籠も蒸し上げて搗き始めると、其勇ましい杵の音

で、まだ暗いうちから子供や寮の人達も皆目を覺して、見物に來ては、其搗たての小餅を二つ三つづゝ惠まれるのが中々興味深い事でした。

供餅が出來上つて所で、桐園は書齋文質の床の間に、北島雪山の、前村深雪裡昨夜一枝開といふ達筆の書幅をかけ、其傍の掛花生には、それに因んで、一枝の梅を挿み、其前に今搗たての鏡餅を飾り、稻穗の蓬來を掛けるのが迎春の定つた裝飾ぶりです。

◎年の名殘　校舍の名殘

除夜には寒泉が必ず客間の西夾に出て歲暮の賀客を受け、歲晩と新年の七律一首づゝを全唐紙に認めたのを來客に示した相です。歲晩の詩の起句には、何十何年今且暮といふ一句を置いて、其後に過去一年間の出來事を述べ、新年の詩には、何十何年今且至と起して、慶賀の意味を述べるといふ作風でしたから、其詩によつて其年度の出來事がよく窺はれた相です。

尙此の次には、懷德堂の改築及び聖廟建設の計畫も廻らされてありましたのに惜むべし悉く水泡に歸し、世は維新の大改革から學制の變更となり、有爲轉變の世の中に、末路の悲況、廢校の否運となり、明治二年十二月廿五日に、

百餘り四十路四とせの文の宿けふを限りと見かへりて出づ

の一首を校門に貼附して、平家の都落の如くに、相携へて學校を見捨てたといふ事です。是等は稿を

改めて、己巳殘愁錄と題して、家兄が筆を繼ぐ相ですから、私の拙文は此に筆を止めて置きます。（昭和六年八月盛夏）

新懐徳堂の建設まで

今井貫一（談）

新懐徳堂建設は、明治四十四年十月上旬に、懐徳堂記念會の名を以て擧行されたる懐徳堂先賢の祭典に起因したものである。その時の經費に六千圓餘りの剩餘が出來たのも、新懐徳堂を起さうといふ重要な一つの原因になつたのは勿論であるが、先賢の祭りをした當時、有志の間には懐徳堂復興の希望が可なり強く主張されて居つて、それが新懐徳堂建設の最も重要な厚因になつて居ると思ふ。

明治四十四年の祭典後直ちに懐徳堂復興の議が唱へられ、西村碩園先生を中心にして寄々話があつた。急先鋒は無論碩園先生であつた、先生は直に復興計畫に着手され、復興の方法並に復興する懐徳堂記念會の役員になつて貰ふ人々なども、私かに物色して居つたのである。永田磐舟翁などは理事長